

老人国

中篇



夢遊星人

玄関に入って直ぐの、応接間兼居間のような部屋に通されました。すぐ向かいには大きな窓になっていて、明るい昼の光が部屋に満ちていました。ダルマ大統領は左手の事務机の後ろに、車椅子に身をもたせていましたが、私たちが入ると、体を揺すって、身を乗り出すようにしました。あまり何度も揺するので、椅子から落ちてしまうのではないかと思われるほどでした。

「ようこそ、ようこそ、セイトさん」とくり返しました。

「ようこそ、老人国へ。あなたなら、きっと来てくれると思いましたよ」

私はこんなふうに特別扱いされたのは初めてでしたので、すっかり照れてしまって、なにを言っているのかも分からず、とにかく挨拶をしました。

「始めまして、ダルマ大統領。私のような普通の人間をお招きくださって、ちょっとあがっています」

「なにをおっしゃるんですか。私だって普通の人間です。たまたま誰にも分かりやすい、普通の人間だったからこそ、大統領に選ばれたのです。この国では、誰も特別扱いされることはないのです。セイトさんはまだこの国の人ではないので、特別にご招待したのです。この国の人ではない方は、すべて老人国の準国民としての待遇を受けます」

「私は気ままに生きてきた人間ですから、大統領のご用事もうまく果たせるかどうか分かりません。ここへ来るまでも、半分本当とは思っていませんでしたから」

「あちらの国で気ままに生きてこられたのなら、それは非常に難しい、たいそう苦勞なことでしたでしょう。ますますたのもしなお方だ」

私はほめられて、ますます照れてしまいました。ダルマ大統領は、そばに立っているひよこの方を見て、紹介しました。

「このひよこさんは、私の秘書を務めてくれているひよひよさんだ」

「始めまして、ひよひよです、よろしくね」　ダルマさんより一回り大きい、ひよこの秘書はウインクして言いました。私もにっこりして挨拶を返しました。どうも私は人間よりも、動物の方が気安くなれるのです。ダルマさんはまた、ブンブクの方を向いて言いました。

「このタヌキさんは、もうご存じでしょうが、この国の仕事を何でもこなしています。老人たちにもとても人気があるので、次期大統領に選ばれるでしょう」

「僕はダルマさんの手足になりたいだけで、大統領なんてとんでもないです。僕はダルマさんのような知恵がありませんし、議論も下手です」

「知恵のある人はこの国にいくらでもいるのだよ。みんなの幸福を考える人が、大統領に相応しいのだ。それも自分からそう思い込むのではなく、皆が見てその人を選ぶのだよ。選ばれてみて、初めて自分がそういう人間であることに気づくのだ。それが本当の大統領なのだから、大統領に選ばれたからといって、少しも臆することも、ましてや得意がることもないのだよ」

「わかりました。でも、ダルマさんがいつまでも大統領でいてください」　ブンブクは素直にうなずきました。よほどダルマさんに感服しているのでしょう。

「さて、セイトさん、この国に来てくださったからには、まずこの国の憲法について、お話ししなければなりません。その前に、どうぞお坐り下さい。長い山道をお疲れでしょうから」

ダルマ大統領は、私のほうを向いて言いました。それまで私とブンブクは立ったままでしたが、秘書のひよひよが、ダルマ大統領の事務机の前に柔らかそうな椅子を運んで、私に勧め

ました。私は多少緊張がほぐれて、椅子に腰を落としました。ブンブクは部屋の隅のソファに腰掛けました。ひよひよは出て行って、台所でお茶を入れているカップの音がしました。

「わが家ではアフタヌーン・ティーの習慣ですが、セイトさんはコーヒーがよろしいか」
ダルマさんは聞きました。ダルマさんの顔は、薄いピンク色を帯びていて、それが日焼けでも、酒焼けでもなく、赤子のような生来の顔色らしかった。それがいかにも紅茶に相応しく思われました。

「私も紅茶党です」と答えると、
「そうこなくっちゃ」と隣の部屋から、ひよひよが代わりに答えました。全員で紅茶を飲みながら、話は雑談の調子で進みました。

「セイトさんはお酒やタバコは」
「今はどちらものみませんね」
「それは好都合。この老人国では、どちらも無用な嗜好品ですからな。この国では、誰もが自由にふるまえますが、あちらの国の害悪だけは、持ちこまないように願っています」
「あのタバコの煙だけは我慢ならないの。人間って、とてもシュールだわ」と、ひよひよが言いました。私もかつて、タバコの煙をいたずら心に、セキセイインコに吹きかけてみたことがあります。パニックにおちいったようです。そのことを思い出して、絶対に秘密にしようと思いました。

「憲法といっても、堅苦しいものではないんです」と、ダルマさんは言いました。「老人が人間として生きるための、誰もが納得できる、ごく基本的な約束ごとなのです。まず、第一条はこうです。

第一条： 老人国の国民は、自分が老人であると思う者なら、誰でもなることができる。

これは老人国の国民となるための資格ですが、特別な条件が必要というわけではありません。あちらの国では、年齢によって、高齢者とか、後期高齢者などと名づけて、いろいろこうるさい区別があるようですが、この国では自分が老人であるという自覚がすべてなのです。ところが、この自覚こそが老人にとって一番難しいことのひとつといえるでしょう。誰もが自分が老人であるとは思いたくないのです。アンチ・エイジングなどというものが流行るのはそのためです。

一体人はどうして自分が老いていくこと、老人であるということ、自ら認めたくないのでしょうか。それはそう認めることが、その社会の中で不利になるからです。まだまだ十分に人としての活動ができるのに、社会の余剰物のように排除される、という言葉が悪ければ、敬遠されてしまうからです。高齢化社会などという言葉の中にも、老人は社会のお荷物だという語感が含まれているではないですか。だから老人たちは老人と思われたくない、まだまだ若い者たちに混じって、普通の仕事ができるのだという気概を持ちたいのです。

それはそれで良いではないかと、あちらの国では言うかもしれません。お荷物ではなく、いつまでもその社会のために貢献できるなら、願ってもないことだと。あちらの国のお偉い方が、“年寄りには、働くしか能がない”と言ったり、“老人は、早く死んでもらいたい”などと口にするのは、若年者や、壮年者と同じ基準を、老人に当てはめようとするからです」

ダルマ大統領は一息つきました。ひよこのひよひよさんは、ダルマさんがアンチ・エイジングに触れたときに、ちょっと不服そうな顔をしましたが、ここで一言コメントしました。

「アンチ・エイジングは、この国でも悪いことではありませんのよ。ただ年齢をいつわるとか、見かけだけにこだわるということではなくて、健康に気をつけて、いつまでも活力を保っていられるということなのです」

ダルマ大統領はにっこりして、
「このひよひよさんは、ひよこのままでお年を取られた、理想のアンチ・エイジングです」
私はあらためて、ひよひよさんを見ました。なるほど堂々とした体格からは、年齢の風格が感じられました。私も子供のままで大人になりたいと思ったことがあります。この国ではそんなことも可能なのでしょうか。

さて、ダルマ大統領はつづけます。

「ところで、老人を差別することは、実は老人自身が行っているのです。自分が老人でありながら、他の老人を見て、あんなふうになりたくないとか、寝たきり老人などは早く死んでし

まえば良い、などと思うのも、また老人なのです。だから自分が老人でありながら、周りが老人ばかりのところへ行くのを、ひどく嫌がる人もいます。これまで自分の生きてきた世界に、その世界から慇懃無礼に排除されても、なおかつとどまりたいという執着にとらわれているのです。そして若者や、壮年者からまともに相手にされなくなるので、孫や動物を相手にせざるを得なくなります。そしてその弱みにつけこむ、老人相手のいろいろな詐欺が流行ります。こうしたことはすべて、老人がこれまで生きてきた世間に、あくまでこだわることから起こるのです。老人には未来や、希望がないのでしょうか。セイトさんはどう思います」

ダルマさんは私の顔を見ながら話しつつ聞いていましたが、あまり一人で喋ってはと思ったのか、私に質問をしむけました。私は老人問題については、ダルマさんに指摘されたように、ほとんど問題意識が希薄でしたから、どう答えてよいのか一瞬戸惑いました。

「私も実年齢よりは十ぐらい、または二十ぐらいは若く考えてますから、まだ老境にはほど遠いと思っています。毎晩の夢の中では、たいてい若者に返っています。目が覚めて、現実の年齢が意識に浮かぶと、うそのような気がしますね。正直、時というものが恐くなります」

「セイトさんは正直でいらっしゃる。誰でも時というものはいやなものです」と、ダルマさんは受けとめました。「特に自分の容貌や容姿の中に、その刻印が刻まれているのを見るのはいやなことです。その上、体力や気力の中にも、時が侵入して、自分が変えられたり、衰えさせられたりするのを感じるのはいやなものです。でもそれは人生を一本調子に考えて、前半の成長と安定の時期だけに価値を置くからではないですか。人生には切り替えが必要だと思いますが、それも単に気持ちの上だけではなく、生活すべてにおいてです。時が変化を生むならば、人間もまたそれに応じて変化していけばよいとは思いませんか」

私はダルマさんの言うことが漠然と分かりましたが、それは私の性格の弱いところを突かれたようにも思いました。

「そうはおっしゃいますが、人間には変化したくないと思う部分があるのではないですか。私には少年期から一貫して、失いたくないと思う私があるのですが。それを常に確かめるためには、やはり過去に執着するほかはないのでは」

私の穏やかな反論に対して、ダルマさんは、

「時がすべてを奪うわけではありません。時によって滅びないものは、第二の人生においても引きつがれます。というのは、ここ老人国での話になりますが、これまでの人生を切り替えることによって、ここ老人国での生活が始まりますが、いわば、それまでの前半生は前世のようなものです。同じ私でありながら、意味も価値も違った生活が始まるのです。後半生においては、前半生において実現できなかった理想を遂げることだって可能になるでしょう。そのような条件を、老人たちは持っているのです。それが老人たちの希望であり、未来なのです」

ダルマ大統領の話は抽象的ですが、老人国での老人たちの希望と未来とは、おいおい具体的に見聞したことを報告してゆきます。

5

ダルマ大統領はつづけました。

「さて、老人国憲法の第二条はこうです。

第二条：老人国の国民には、自立と自由が可能なかぎり保障される。

老人の自立などということを見ると、たいてい人は、体力も気力も衰え、労働や生産に大した貢献もせず、若・壮年層の支えによる年金で暮らしている者たちに、自立などはあったものでないと考えがちです。まして、認知症や寝たきりの老人たちに、どんな自立や自由などがあるのだということになるでしょう。こうした偏見が生じるのは、そもそも老人たちが若・壮年層のお荷物と見なされているにもかかわらず、彼らと交わって暮らそうとすることから起こってくる齟齬が原因です。子供は大人と同じことをしなくて良いように、教育制度で保護されています。ある意味で、老人も子供と同じで、若・壮年者の社会から区別され、保護されていなければならない存在なのです。しかし子供と違うところは、老人たちは自ら自分たちの生活や身のふりかたを決めてゆけます。その気になれば、その他の社会のお世話にならなくても良

いのです。それだけの条件があると、先ほど言いました。

一つには、たいていの老人は、たとえわずかな年金とはいえ、経済的に自立できます。いやむしろ、老人はそれまでにためた貯蓄のような資産を考えると、一般の人たちよりもお金持ちです。その有利な立場を生かさない手はないでしょう。老人ビジネスの食べ物にされたり、おれおれ詐欺などというものに騙されたり、さらには親族のいいようにされたりなどの、消極的な立場ばかりが強調されますが、老人が老人のためにその経済力を生かさないという法はないでしょう。

そもそも老人たちは、それまでに一般社会のために十分な奉仕をしてきたのです。労働はもとより、家族や社会のために奉仕し、その結果なにがしかの資産や年金で、老後を送るだけの準備ができています。老人になってまで、なおもこれまでの社会に奉仕をつづける必要があるのでしょうか。いずれお荷物とさえみなされていくなれば、なおさら意味のない生き方です。老人は老人のために、つまり自分のために生きれば良いのではありませんか。それが老人の自立です。

自立がなければ、十分な自由がありませんから、自立ということが特に大事です。それは単に経済的、物質的自立だけではなく、精神的にもこれまでの一般社会には頼らないという強さが必要なのです。老人は老人として、それ以外の人類とは別の人生を生きる。そこには一般社会とは違った生活、希望、未来があるのです。そのために、老人にはそれまでに培った知識や経験や知恵がたっぷりあるのです。一般世間では無用とされるそうした精神的蓄積を、老人たちは自分たちのために存分に活用できるはずで、この国には、あちらの国では御用済みとなった学者たちがたくさん暮らしていますから、科学技術などでもひけを取りません」

ダルマ大統領は一息つきました。私も老人人口がいずれ三割、四割になっていくということを知っていますが、なるほど彼らの勢力が別の社会を作ったとしても、あながち不思議ではありません。この国はその前段階なのでしょう。私はよくターミナル駅の人ごみの中を歩いていて、行き交う人が圧倒的に若者たちであることに驚かされます。私と同年輩の人たちもあまり見かけない。まして老人たちなどはめったに見ません。私でさえ疎外感を覚えるのですから、老人たちはなおさらでしょう。一体老人たちはどこにいるのか。引きこもり青年以上に引きこもりなのではないか。病院や養老院へ行ってみるとよいと言うかもしれません。なるほど、病院の待合室の半数の患者は老人です。老人同士が会って、親しげに会話しています。話す内容も健康や、病院に関する情報です。この社会でもすでに棲み分けが行われているのなら、いっそのこと老人だけの社会があったら、はるかに便利なわけです。

「さて、老人国憲法第三条です」　ダルマ大統領はつづけます。

「第三条：老人国はボランティアによって運営され、あらゆる仕事はボランティアによって行われる。

これは自由と関係したことです。老人たちはあちらの世界で十分に労働してきたのですから、今さら労働や勤労の必要はありません。この点、あちらの国とは根本的に違います。勤労の義務などもなければ、まして強制もありません。仕事をするもしないも全くの自由です。仕事をしたからといって、給料が出るわけでもありません。これは次の条項の、福祉に関することでもありますが。あちらの国と違って、労働はすべて＜善意＞によるものです。単なる善意でもって、人が他人のための労働をするだろうか、当然疑問に思われるかもしれません。親切は人のためならずと言います。老人国を維持して行きたいという意志が、労働意欲のすべてです。おまけに、人は自分の得意なことを、単にそのことのために続けたいという習性があります。案外人は勤勉なのです。そこで老人国では、必要とする仕事を、その能力と意欲のある人に委ねています。仕事はいくらでもありますので、趣味以外にも退屈することはないはずです」

私はどちらかと言うと、人間に関して性悪説に傾いていますので、そんなユートピアのような労働国家が可能だろうかと思いました。しかし現に老人国が存在しているのですから、それなりに機能しているのでしょう。その疑問を、ちょっと皮肉ってみました。

「もし、働きたくないと言う人が大半を占めるようになったら、お国の経済はどうなるのでしょうか」

「ダルマさんはにっこり笑って、

「家族が困ったことになれば、皆が協力してことに当たるでしょう。さもないと家族は崩壊します。この国は未開社会の共同精神に倣っています。協力の仕方は各自様々です。労働がすべてではありません」

後でおいおい知ったことですが、この国の経済は自給自足が原則で、競争とか、資本主義とか、交易とかの、生き馬の目をぬくようなことはないのです。私はうなずいて、ダルマさんの次の言葉を待ちました。

「さて、第四条は福祉に関することです。

第四条：老人国の国民は、衣食住および医療に関して、なに不自由ない生活を保障される。

具体的に言いますと、家はもちろん、衣類、食品はすべて無料で支給されます。もちろんそれでは共産主義みたいで面白くないという人は、家以外は自由に自分で調達できます。老人国の国民は、国民となった年から、毎年一千万円の年金を受け取ることができます。それをどう使うかは各自の勝手です。ただし、ギャンブル、投資、パチンコなど、あちらの国の有害無益なことは、ご遠慮願っています。毎年使い残した額は、国に返されます。中にはまるごと返す人もいます。たいていの人は他国の年金の受給者ですが、使わずにためておくことができます。亡くなるときに、寄付を申し出る人もいますが、他国の遺族とのトラブルにならないように、遺留分を残すように頼んでいます。この国の医療は老人医療に特化していますから、世界でも最先端の医療技術と、相互扶助による介護をめざしています。老人国の意義に感じて集まった、熟練の老医師たちがそろっています。医療費はもちろん無料です」

私は老人国のそもそもの財源は、どうやら税金も取らないようですから、どこから湧いて出たのだらうと疑問に思いましたが、話の腰を折ることはやめました。ダルマさんはつづけます。

「第五条です。

第五条：老人国大統領はネット・ワークによる直接選挙によって選ばれる。大統領は永遠平和を希求する老人国を代表して、もっぱら国内外の平和交渉に当たる。任期は四年とする。

大統領は、国内・国外での平和を保つための活動に専念する以外には、なんらの権限も持ちません。あちらの国でのように、権力欲や、支配欲とは無縁な役割です。まして他国と争うようなことはしません。それは第9条と関係してきますが、その前に第6条は、

第六条：老人国議会はネット・ワークによる全員参加議会とする。そこでの議案は、三人の賛成があれば可決する。

老人国議会では、多数決などと言う曖昧で、危険な議決法はとりません。徹底した民主主義ですから、本来一人の賛成でも可決すべきですが、そこは三人寄れば文殊の知恵と言いますし、提案者の善意を信じます。老人国で生じたあらゆる問題は、ネット・ワークによる議会で討議されます。そこでは意見を統一することよりも、交換し合うことによって、様々な見方があることを知り、偏見や独善に陥らないようにします。めったにないことですが、老人国で起こった、あちらの国でいわゆる“犯罪”についても、全員参加の議会で評議されます。老人国では法律などと言う煩瑣なものもありませんから、問題が起こればすべて全員で評議します。だから刑罰もないのです。最悪の場合、老人国からの退去を願うばかりです」

どうやらこの国は善人ばかりの国のようです。しかしたとえ善人ばかりが集まって国を作ったところで、よそから悪人が侵入しないとも限りませんし、そもそも“うまい話”には偽善者や悪人が寄ってたかるものです。老人国がそういう悪党の餌食にならないとも限らないではないか

。そういう用心がこの国にはないのだからと、私は老婆心ながら、人のよさそうなダルマさんを見ていて、少々心配になりました。しかし、口には出しませんでした。ダルマさんはつづけます。

6

「第七条から九条までは、老人国の理想を述べています。

第七条：老人国の国民は生命を最高の価値として尊び、可能なかぎりの長寿を全うすることを願うものとする。

私の私淑するお釈迦さんも長寿を全うされましたが、老いてなお生命は美しいものだと言っておられます。老人は汚らしいもの、早くあの世なりと、残すものは残して、旅立って欲しいと、あちらの国ではたいていの人が思っています。認知症になり、寝たきりになった老人のどこに、いわゆる“人間の尊厳”があるのだ、ということになります。だから尊厳死などと称して、自殺が流行ります。自分の生命に誰もが尊厳を感じてくれないことが分かっているからです。せめて、ただの“生命”になる前に、自分で自分を尊敬しながら死んでゆきたいということです。老人国でも尊厳死は認めます。それは個人の自由に関することです。しかし、たいていの方は、意識がなくなっても、周囲が自分の生命を尊重してくれていることが分かっていますから、安んじて生命の根源に帰ります。無用な延命措置こそしませんが、最後の最後まで命は保ってもらいます」

ダルマさんはさらにつづけます。

「第八条は、老人国の文化政策です。

第八条：老人国の国民は、心身ともに文化的な生活を送るための、あらゆる施設を利用することができる。

もはや義務教育などはありませんが、老人に相応しい教養および研究施設は、提案さえあればすべて備わっています。これは特に、教養人であられるセイトさんには、ご興味のある方面ではなかろうか」

教養人などといわれて、私は少し照れました。しかし、あちらの国ではもはや死語に近いことばが、この国ではまだ生きているのが嬉しい気がしました。

「スポーツなどの施設もないわけではありませんが、身体の方はどうも趣味に偏るようです。老人向けのエアロビクスとか、フラダンスの会とか、そういうものが主流です。競技などは、もはや老人は肉体の力や技を競い合う必要がありませんので、あまり流行りません。しかし、教養や学術の方面では、あちらの世界に劣らないどころか、むしろ凌駕しています。老人大学をはじめ、さまざまな研究機関、医療機関があります。老人大学では誰でも講義が聞け、また誰でも講師になることができます。セイトさんも一つ、小説講座でも開かれたらどうですか」

「いや、私はただのアマチュアですから」

私はますます照れてしまいました。私は昔からシャイな人間ですから、誉められても素直に喜べないのです。そのくせ、自我だけは強いのですが。ダルマさんはにこりとして、

「小説を書かれる方は、押しの強い方ばかりと聞いていましたが。さて、最後の第九条ですが、これは永遠平和の条項です。

第九条：老人国の国民は永遠平和を希求し、争いの解決の手段として一切の戦争を放棄する

。したがって、軍隊、警察、それに類するものは一切保持しない。

「あちらの国では、今、首相が率先して、第九条を廃止し、戦争ができる国にしようとしているようです。かつて老人たちは、自分たちが直接戦争に出るのではなく、戦争の指揮だけを取って、自国のたくさんの若者たちを殺しました。今あちらの国の老人たちは、またそれをくり返そうとしているのです。血気にはやった若者や、壮年者が戦争に走ろうとするのを止められるのは、本来経験豊かな老人のはずではないですか。老人が老人どうし殺しあうのはめったにないことです。老人は本来平和な人種なのです」

ダルマさんの言葉にも熱がこもりました。

「今現在、地球上いたところで戦争が行われています。民族や宗教や体制の違いなどから、たがいの憎しみを殺戮によって解決しようとしています。兵器の発達は、ボタン一つでどこか遠くの国の知らない人間たちを、大量に殺戮することを可能にしています。まだ戦争の起こっていない国々でも、戦争を煽る者たちがわがもの顔に跋扈しています。それを抑止する憲法が邪魔で仕方ないのです。老人たちがたとえ戦争を止めることができないとしても、少なくとも率先して戦争に走るべきではないでしょう」

ダルマ大統領は、その大きな目を閉じてしばらく沈黙した後、

「以上が老人国の憲法です」と締めくくりました。

「約束事はなるべく少ない方が良いでしょう。あとは老人国国民の善意を信じるだけです。良識は人間の間で平等に分かたれている、とデカルトという哲学者も言っています。とりわけ経験が良識へと導いてくれますから、老人たちにはあれこれと注文する必要はないでしょう。

さて、私の長いおしゃべりでお疲れでしょうから、これから皆で戸外へ出てみましょう」

そうダルマさんは言って、ひよひよの方を向き、

「今日の予定はどうなっているかね」

と聞きました。ひよひよはパソコンを操作して、大統領のななめ後ろにある大きなモニターに予定表を映しだしました。

「三時に、クラシックおじいさんの家に招かれています。それから晩は、ホスピスB2で会食です」

「それでは、老人国を案内がてら、セイトさんにも私の予定に付き合ってもらおうか。よろしいかな」

もちろん、私に異存などありませんから、喜んで承諾しました。

(老人国・中篇 了)